モリル法（1862年）と私立大学の改革
——ラトガース大学科学校の成立をめぐって——

日本大学　羽田 積男

1 はじめに

19世紀後半のアメリカの教育は様々な変革に影響されている。大学教育においては、R.ホプスタッカーが指摘したような「大いなる後退」期を経て、やがてカレッジから＝＝パーセンティーヘと、発展が認められる。このことはアメリカ大学の近代化ともいえるし、またアメリカ大学の誕生として捉えることもできるだろう。特に1862年に成立したいわゆるモリル法は、大学教育に大きな影響を与え、この法律によって設立された大学も数多いのである。アメリカ大学としての州立大学の発展は、この時代に一層拍車をかけられた。従来の研究の多くがモリル法と州立大学との関係を解き明かすためのものであったのも当然のことである。

しかしモリル法は州立大学の新設やその整備のために成立したものではなく、大学教育の中に農業や工業といったより実際的な学問分野を定着、拡充しようとしたものであった。各州のモリル法への対応は様々であり、F.ルドルフは次のように整理している。即ち、既存の州立大学の中に農業、工業の部門を設けた州、農工大学（A&M Colleges）を新設した州、新たに州立大学を設置しその中に農工部門を設けた州、さらに加えて既存の私立大学にモリル法を適用した州等である。この私立大学にモリル法を適用した例として、(1)コネチカット州イェール大学シュフールド科学部、(2)ロードアイランド州ブラウン大学、(3)ニューハンプシャー州ダートマス大学、(4)ニュージージー州ラトガース大学、(5)ペンシルベニア州トランスルパニア大学、(6)オレゴン州コーバリンス・メソジスト大学をあげている。

さらにデラウェア、マサチューセッツ工科、パデュー、コーネル等の各大学も私立の財政的基盤の上に連邦土地交付金（モリル法）が重なって成立した大学である。従ってモリル法によって設立され、あるいは援助を受けた大学の設立様式は単純な方式でなく、むしろ多様なものであったといえよう。その設立様式の研究となると従来必ずしも十分でなかった。むしろモリル法と州立大学との関係の中で、これらの私立大学のことが言及されたのに過ぎなかったようである。
モリル法（1862年）と私立大学の改革

本論稿は、モリル法と私立大学の関係の中から植民地大学の一つで宗派大学でもあったラトガース大学を例にとり、モリル法が如何なるインパクトを私立大学に与えたかを考察し、1860年代からはじまる私立大学の諸改革の一端に迫ってみようとするものである。

ラトガース大学はモリル法の適用を受けた私立大学の中でも、その適用を州内で独占した例外的な大学であった。そしてモリル法による基金によって州の教育機関としての科学校を私立大学の中に設置し、やがて様々な変革の後に、ラトガース大学自体が州立大学へと転換していく端緒となった。私立大学が州立大学に吸収された例や、私立と州立との共存関係は今日でもみることができるが、ラトガース大学は、植民地時代に設立された古い大学であり、また特定宗派の大学でもあった。従ってここには、アメリカ大学の直面した様々な問題が潜んでいるだろう。

ところでラトガース大学は日本の近代教育にも多大なる貢献をしたアメリカ大学の一つであった。特に幕末から維新期にかけて多くの留学生がこの大学や大学の予備コースに学び、また多くの御雇教師や宣教師がこの大学の出身者や関係者であったことは周知のことに属するであろう。ラトガースと日本との出会いは、モリル法がラトガースに適用された後直後のいわば改革の時代であって、この改革の余波は遠く日本にも及ぼし、

以上アメリカ大学史におけるラトガースの改革と、日本との関係におけるラトガースの二つの問題を意識しつつ、ラトガース大学の科学校設置の経緯と科学校での教育について考察してみたい。

2 植民地大学からの脱皮

アメリカ独立以前に創立されたいわゆる植民地大学 (Colonial Colleges) は9大学を数えるが、ラトガース大学 (Rutgers College) は1766年オランダ改革派教会 (Dutch Reformed church) によって創立された。設立当初はクィーンズ大学 (Queen’s College) と称したが、1825年に改称しラトガースとなった。ニュージャージー植民地には二番目の大学として誕生し、長老派の設立したプリンストン大学 (1746年創立、1896年以前はCollege of New Jersey と称した) とは、様々な面で競合する関係であった。

植民地大学はいずれも宗派と深い関係をもっており、オランダ改革派教会の信者多くが居住していたニューヨーク、ニュージャージーの両植民地はそのままラトガース大学を支える基盤であった。その後ラトガースも1850年代までは、植民地大学の性格を保持し続け、しかも「設立当初からのカレッジの特徴となってきた不完全な状態がそのまま続いていた」ともいった。即ち、休学閉鎖の状態が続いていた。教員、学生が不足し、

—111—
I 研究論文

また大学の建物や諸設備が不十分であったことはラトガースに限ったことではないが、ことに弱小なラトガースではこうしたことが多かったのである。ラトガース大学と改称した1825年からモリオ法が成立した1862年までに約1000名が入学し、726名が卒業し、その内234名がオランダ改革派教会の聖職者となり、97名が他教派へ職を求めている。

卒業生の半数近くが聖職者となった事実は、ラトガースの宗教的性格を如実に示している。

1860年代のアメリカの大学は、科学の台頭、宗教に対する様々な対応、ドイツ大学の影響、産業社会の発達等により、旧来の植民地大学体質の転換をせまられていた。南北戦争に加え、工業社会、農業社会の地盤変動は、やがて大学にも及び、大学を変革させるのである。

ラトガース大学の内部においても不完全な状態に終止符を打つべく学内の改革着手するようになる。例えば従来神学校教授によって教えられていた修辞学と文学（Bells Letter）の授業は、ラトガース専任教授によって教授される英語（English Language）と文学（Literature）と代わった。ここには教授の獲得と教育内容の革新がみられるよう。こうした学内の努力は1860年頃までには幾つかが試みられたが、大学体質の改善には至らなかった。そしてむしろ危機に直面する。

かつてホイッグ党から副大統領候補に指名された経歴を持つ老学長が75才の高齢をもって1862年秋を去ったのである。しかもこの学長フリーリング・ハイゼン（Theodore Freinhuysen、1787—1862、1850年以降学長）は1)、ラトガースの創立者の一人ともいうべき宗教家で、あの宗教大覚醒（The great awakening）を主導した人物の曾孫にあたった。老学長は年を大学のために献げたが、大学の大幅な刷新までには至らなかった。特に宗教界に力もった学長の死は、宗派を基盤とする大学にはかけがえのない損失であった。

後任学長には宗派の神学校（Theological Seminary at New Brunswick）3) 教授でラトガースでも教えていたキャンベル（Rev. William Henry Campbell, 1808—1890）が就任した。新学長はプリンストンの神学校で学び、牧師を経験した後、ニューヨーク州オーバニーファデミー（Albany Academy、生徒数約250名の男子の中等学校で8年制と5年制の課程をもつ、8年課程の卒業生は多く大学2年に編入学した）の校長となり、1851年に神学校教授に就任した。神学校教授から大学の学長に就任することに当時通常のことで、ラトガースにおいては学長はオランダ改革派教会の会員でなければならない、また大学で神学（Divinity）を教授できる者でなければならなかった。こうした条件を満たせるのは、学校管理職の経験をもつキャンベルしかいなかったのである。

キャンベルがラトガース大学史上初めて選挙によって選出され学長となったのは、18
モール法（1862年）と私立大学の改編

62—63年のことであるが、この時5人の教授陣と100名を少し超える学生が入った。その教育課程はまことに古典的なもので植民地大学の特質をよく伝えている。

教育課程 1862—63年

<table>
<thead>
<tr>
<th>時限</th>
<th>1学期</th>
<th>2学期</th>
<th>3学期</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>[1年]</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1</td>
<td>ラテン語</td>
<td>自然科学</td>
<td>数学</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>ギリシャ語</td>
<td>ラテン語</td>
<td>ギリシャ語</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>数学</td>
<td>ラテン語</td>
<td>ギリシャ語</td>
</tr>
<tr>
<td>[2年]</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1</td>
<td>数学</td>
<td>ラテン語</td>
<td>ギリシャ語</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>ラテン語</td>
<td>自然科学</td>
<td>自然科学</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>ギリシャ語</td>
<td>数学</td>
<td>ラテン語</td>
</tr>
<tr>
<td>[3年]</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1</td>
<td>ギリシャ語</td>
<td>ギリシャ語</td>
<td>ラテン語</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>英文学</td>
<td>物理学</td>
<td>物理学</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>自然史</td>
<td>英文学</td>
<td>自然哲学</td>
</tr>
<tr>
<td>[4年]</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1</td>
<td>自然史</td>
<td>天文学</td>
<td>自然科学</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>天文学</td>
<td>ラテン語</td>
<td>ギリシャ語</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>学長講話</td>
<td>学長講話</td>
<td>道徳哲学</td>
</tr>
</tbody>
</table>

1863年9月の新学期は、キャンベル新学長にとっても実質的に新しい学年度であった。新学長としての課題は山積していたが、新学期までに人事問題だけは片付けておく必要があった。新学期には二人の教授の欠員補充が必要で、一人はギリシャ語担当の教授としてラトガース出身者が採用し、もう一人は数学及び天文学担当の教授で、オーバーニュアカデミーからキャンベル学長の後輩としいうちから若手の教授を採用した。後に来日して文部省学監となるモールー教授（David Murray, 1830—1905）である。

モールー教授の採用には、自然科学の部門を担当していたクック教授（George Hammell Cook, 1818—1889）の役割が大きかった11)。加えて学長自身の存在も大きな意味をもっていた。何故ならクック教授もキャンベル学長もオーバーニュアカデミーの校長経験者であり、モールーもまたラトガース大学教授として転出するまで、このアカデミーの校長をしていたのである。キャンベル学長は1845年から51年まで、後任クック教授は51年から3年間、そしてモールーはクックと入れ替わりにアカデミー教員となり1857年
I 研究論文

からは校長の地位にあったのである。

クック教授はアメリカ最初の工業大学と称されるレインセラー（Rensselaer Institute, 1824年創立、オーバニー近郊トロイ）でァ.イートンに主に地質学を学び、卒業後同校で教え、一時ガラス製造業に従事した後、キャンベル校長の後任としてオーバニーアカデミーの校長になったのである。キャンベル自身から推薦を受けての人事であった。校長在職中のクックは当時隆盛を誇っていたユニオン大学（Union College, 1795年創立、オーバニー郊外）に出検し、ここで若きモルレーを知ったのである。

モルレーのラトガース大学教授就任は、クック教授推薦の下にすすめられた12)。先輩校長のキャンベル学長は、同じスコットランドの血をひくモルレーに特別の親近の情を寄せたであろう。こうしてオーバニーアカデミー閣ともいうべき人々の結合は、ラトガースにその活動の場を求めることになった。

自然科学の部門を担当する教授が二人揃ったことはラトガースにとっても初めてのことであり、ましてレインセラーで学び教えたクック教授と、アメリカで最初に工学教育（Engineering Program, 1845年開始）を実施した旧来（Liberal Arts College）の大学ユニオンに学んだモルレー教授の師弟協力関係は、小さな大学にとってまことに大きな意味をもつものであった。一年後即ち1864年にはラトガースの首脳陣は、キャンベル学長、クック副学長、モルレー代表教授（Secretary of the faculty）となっていて、いかに強力な指導体制が実現できたか理解できよう。さらにキャンベル学長の後任学長までが、このオーバニーアカデミー閣の人だったことを考えると13)、キャンベル学長の学内改革の基礎は、強力な結合力と指導力を発揮できる教授陣にあったことが読み取れよう。こうしてラトガース大学は、1860年代の前半にまずそのアカデミックな面での学内改革の芽を育てることに成功したのである。

そして残された課題は、大学財政の健全化にあった。「南北戦争前のカレッジの性格であった変化に対する対策は、疑いもなく、資産が不十分であったことにもとづく」14)とするならば、ラトガース大学にも、戦時でさらに悪化した諸条件の克服と、大学財政の不安定な状況に立向かう姿勢が求められた。キャンベル学長が最初に行なった財源獲得のためのキャンペーンでの標語、「大学の門戸が閉じられる日もそう遠くないではないであろう」15)は、この間の事情を語って余すところがない。幾度か大学閉鎖を余儀なくされてきたラトガースの支持者にとって、これは強力なキャンペーンであった。

こうしてキャンベル学長は次々と財源の確保に成功し、ラトガースに改革時代を招来することになる。むしろ保守的で、伝統主義的なキャンベル学長のもとにラトガースはその植民地大学的特質から脱け出す。
モリル法（1862年）と私立大学の改革

3 モリル法とラトガース大学

モリル法によって各州に州立の大学が確立されたことは前にもふれたが、この法はまた大学教育の様々な部面に影響を及ぼした。弱小な宗派私立大学にとっても重大な法律であった。いわば私立大学にとっては危機的状況の到来が予想されたからである。公立の大学が多数設立され、より授業料の安い、しかも実際的、技術的教育が広く行なわれることは、たださえ限られた大学入学者を奪われることを意味したし、また古典的教育課程しかもてしていました大学にとっては、新しい教育課程を整備した大学の登場は啓発でもあった。すでにこの時代の卒業生は、商業等の新しい分野へ進出はじめていたからである。

1862年7月2日、南北戦争中にリンカーン大統領の署名を得て成立したモリル法は、全8条から成り、戦時想を幾分含むものの、合衆国独立後の一連の土地政策の一つとみることができる。戦前より農業や工業の教育は各州や地域で実施されていたが156、大学教育の段階で、しかも全国的な規模で行なうという構想は教育史上でも画期的なことであった。

モリル法（The Morrill Act—An Act Donating Public Lands to the Several States and Territories which may Provide Colleges for the Benefit of Agriculture and the Mechanic Arts）は、連邦政府が各州選出の合衆国上下議員一人に対して3万エーカーの公有地を各州に与え、州はこの土地を1エーカー当り1ドル25セント以上で売却し、売却総額で基金を創設し、年間少なくとも5%の利子で基金を運用し、その運用利益をもって農業や工業に奉仕する大学を州内に少なくとも一大学設立する、というのが基本的構想であった157。

ラトガース大学の本拠地たるニュージージ―州は2名の上院議員と5名の下院議員を選出していたので、合計21万エーカーの土地が連邦政府から付与されることになる。つまり州は、少なくとも26万ドル以上の基金と、その運用利益13,125ドルを期待できたのである。

モリル法の第4条は、この法律の中核をなす条文であるが、この法の目的を、従来の古典的大学教育に加えて農工業を振興する教育を大学で行ない、しかもエリートであるための教育でなく、労働階級（the Industrial classes）のための実際的なる大学教育を行うことを謳っていた。

ニュージージー州ではこのモリル法を受け入れることを議会で決議し、1863年3月21日に "An Act Accepting on the Part of the State of New Jersey a Grant of Lands made by the United States to the Several States and Territories..."
I 研究論文

which may Provide Colleges for the Benefit of Agriculture and the Mechanic Arts” という法律を成立させ18)，連邦からの土地交付を受け入れる準備は整った。同法は全3条で構成され、第1条ではモリル法の受け入れを、第2条ではその受け入れの条件を、第3条では交付される土地（ニュージーランド州の場合は土地証券 Land Scrip）を受理すべき州委員会（Commissioners）の設置を定めている。

こうして州におけるモリル法の受け入れの第一歩は踏み出されたが、同時に大問題を抱えることになった。モリル法第2条で定められていた土地価格1=1/2=1ドル25セント以上は、実際の売却では112,160ドルにしか相当しなかった19）。この価格は州が当然のこととして期待したモリル法のいわば公定価格の半分以下であった。結局州委員会が実際手にした初年度の運用利益は5,800ドルでなく、到底大学を新設することとは困難であった20）。しかもモリル法は、その適用にあたって様々な条件を付しており、校地の購入や実験農場の取得には基金の10分の1しか使用できず、また大学の建物の購入、維持のためには基金はおろか、その運用利子までも使えないかった。

州の方針は大学の新設を断念する以外に方途がなく、モリル法の受け入れを決議してから1ヶ月の月日をむらなく費やした。

一方ラトガース大学の内部にもこのモリル法の成立、州の受け入れ決議の経過に強い関心を寄せる者がいた。クック教授である。また着任後間もないモルレー教授もやがてクック教授と同じ関心を抱く。1863年の新学期は新学長を迎え、教授陣が若返った後だけに大学には新しい方向を目指す気運が高まっていた。また南北戦争に幾多の学生を戦場に送った後だけに一層来たるべき戦後の再出発のための準備は用意されていなかった21）。

クック、モルレー両教授は協力してモリル法のラトガースへの適用を検討しはじめた。この間の事情は、例えばイエールの本拠地ニューハイブンのワナー（W. Warner）からモルレー教授宛返書（1863年12月11日付）がよく物語っているだろう22）。この返書はモルレー教授からの問い合せに回答されたもので、イエール大学とジェフィールド科学校との法人関係、チャーター（設立認可状）の有無、モリル法適用の場合の手続き等が記されている、コネチカット州議会のモリル法受け入れ関係の法文のコピーが同封されていた。ラトガース大学の二人が最も知りたかった事柄が読み取れよう。

この返信が書かれる３日前、即ち1863年12月8日ラトガース大学教授会（Faculty Meeting）は、モリル法による土地基金をラトガースへ導入するよう決議し、その決議を大学理事会へ提出した。二人の構想は、ジェフィールド科学校をモデルとして、農業、化学、工学、機械等の各分野を教える科学校の設立へと成長をとげていたのである。

— 116 —
4 ラトガース大学科学校の成立

19世紀中期のアメリカの大学の教育課程はなお古典主義的傾向が強く、新興科学に対する扱いは、旧来の学問分野と同等のものではなかった。1828年に発表された「イーレル報告」に代表されるような古典教育重視の思想は、大学で実用諸科学を教えることを拒んでいた。従って大学で新興科学を教えとしても、「大学の裏口からしぶびこんだ」というような状態であり、決して大学の中で正当な地位を占めていたわけではない。しかしその裏口の役割を果たしたのが「科学校」(Scientific School)なのである。この裏口たる科学校はやがて正当な地位を得て、専門学部や大学院へと発展を続けることになる。

科学校は、イーレルとハーバードにほぼ同じ頃設立された。イーレルには1846年にコネチカット州及び近隣諸州の農業社会を基盤として、ハーバードにはその翌年ボストンを中心とする新興工業社会を背景として、設立されたものである。古典的教育の大学（カレッジ）とは別の学校（スクール）として3ヶ年の課程で開校し、学位に相当しない卒業証書を発行する特殊な機関として大学の中に取り込まれたのである。しかもこれらの科学校は、産業社会の代表者ともいうべき富豪の多大なる寄付や特別な人間関係をもとに確立されたもので、イーレルもハーバードもともにその科学校の名称に富豪の名を冠して産業社会に応ええたのである。

さてニュージージー州当局のモリル法への対応は遲々として進まなかったが、1864年1月12日に至りようやく州議会内に特別委員会（Joint Committee）を設け、上院から3名、下院からは5名の委員が選出され、州内におけるモリル法の適用方法を検討することになった。即ち州内の大学から適当な大学を選び、この大学にモリル法の基金及びその運用利益を重ねる方式を選択する以外に有効な方法はなかったのである。この頃にはすでに他州の動向も次第に明らかになってきており、ニュージージー州の取るべき方法は、他州から学ぶことができたのである。

州の動向を刮目していたラトガース大学は、同年1月13日、即ち州議会が特別委員会を組織した翌日大学理事会を開催し、モリル法の受け入れを検討することになる。

この日の大学理事会は、まずモルン教授の天文学の教授のための赤道儀、子午線球体、天文学用時計、星座一覧、機器収納庫、石角柱等総額2,875ドルにも達する備品購入を討議している。モルン教授は机上の天文学からより実際的な天文学の教授に踏み出すようとしていたのである。あるいはモルン教授の就任記念としての天文学機器の導入であったかも知れない。すでに教授会では決定し、モルン教授自身の手によって提案書が理事会に上提出了のである。

—117—
I 研究論文

理事会は後に教授会名で提案された案件，即ちモーリル法を導入し，ラトガースに科学校を設置することを討議し，ついにラトガースの設立目的（charter）に照らしてしても科学を教える部門を設けることは有益であるとし，正式に科学校の設立を決定したのである。こうしてラトガース大学科学校（Rutgers Scientific School）が設立されたのである。勿論この時点ではモーリル法適用の行方はまだようやく検討段階に入ったところであった。従ってラトガースは，独自に科学校の設立を決定したのである。すでにモーリル法が成立してから1年半の月日が過ぎていた。

大学理事会は科学校設立を決議した後，いかにモーリル法の適用を受けるかを討議し，3名の大学理事を選出し，州議会へ請願書を提出する委員会（the Committee to Memorialize to the Legislature）を組織した。委員には，元州知事の経験をもち，自身オランダ系でありオランダ改革派教会員のブルーム（Peter D. Vroom, 1791—1873）を含む強力な布陣を敷いた。つまりラトガース大学理事会は，このモーリル法の適用が政治的な様相を帯びることを考えてとったのである。

当時ニュージャージー州には，植民地大学のプリンストンとラトガース，ローマ・カトリック系のシートン・ホール大学（Seton Hall College，1856年創立），そして州都トレントンに州立師範学校（State Normal School，1855年創立）等が存在していた。シートン・ホール大学を除く3校が有力に映ったことは，誰の目にも明らかだった。

州内で最有力であったのはプリンストンであった。しかし州の管理の公的基金を獲得するとなると州立師範学校も忽然有力となる。州立師範学校はマサチューセッツ州にその根を深め，1830—60年代に多くの州で設立された教師養成の学校で，ニュージャージー州においては，その設立から一貫して校長フェルバス（William F. Phelps, 1822—1907）によって主導されてきた。州立の教育機関であることが何といっても強味で，しかも1860年からは州農業会（State Agricultural Society）の援助のもとに農業を教えることも有利な点であった。

州内最古にして最大の規模を誇るプリンストンも科学校設立をめざしてモーリル法の基金獲得運動を開始したが，この運動の実質的担当者は道徳哲学の教授（Lyman H. Atwater, 1813—1883）で，教授自身は名前の通った論客であったが，運動を支える実質的知識に欠け，また大学の財政的裏付けも不明確であった。プリンストンの誇る卒業生，即も多くの大学長や教授，専門職に就いている人々からジェフィールド科学校と同等の設備を大学に寄贈する計画がすすめられていたが，その具体性にはなお乏しいものがあった。

ラトガースではクック，モルレー両教授に加え，キャンベル学長が熱心であった。オーバニーアカデミーの歴代校長が科学校設立の中心的役割を担ったことになる。クック

—118—
モリル法（1862年）と私立大学の改革

教授は州内においては知名度も高く、州の地質学者（Assistant State Geologist, 1854年から）としての活躍が実を結び、特に農業、鉱業、土木関係者等にはその仕事の性質上良く知られていたのである。彼の仕えた上司（William Kitchell）は、クック家の親しい友人の一人であり、クック教授の活動には幸いした。

クック教授より12歳年少のモリル教授もよくクック教授を助け、地元新聞への論説発表、パンフレット作成、科学校カリキュラムの編成等クック教授の片腕として力を発揮した。クック教授が専門家の立場から外へ向って大学を導けば、モリル教授は教授会をまとめこれを援助するという二人的役割は、いわばラトガース革新への両輪であったといえよう。

ラトガース大学にはすでにクック教授が州の仕事として採集した鉱物資源の標本類が備えられていて、いつでも授業や実験に供することが可能であった。実験室はすでに設置済で、また農業実習用の土地も大学に隣接していて賃収が可能であった。しかも大学の本拠地たるニューブランズウィック（New Brunswick）には、新興産業も含めてゴム、製紙、衣類、食品加工、機械等の工場がラリタン河の河岸に建設されていた。しかもモリル教授が新聞論説で強調したようにラトガース大学は南北に長い州のほぼ中央部に位置しており、ニューヨークとフィラデルフィアの陸上交通の中間点でもあり、またラリタン河は水路としてニューヨークへ、また大西洋へと開かれていた。

1864年2月23日、州都トレントンでの州議会特別委員会における公聴会において、州内の大学による基金獲得運動は最高潮に達した。すでにプリンストンの激しい攻撃で州立師範学校は脱落しかかっていた。誇るべき農業教育を攻撃されたのである。即ち、師範学校の農業教育は、農民のためのものでなく、将来農民の子供を教えるようになる女子学生のためのものであると決めつけられたのである。ラトガースもこの攻撃に加わり、ラトガースでの基金募集の成功に比較し、州立師範学校は、毎年の州の歳出予算に学校経営が左右されるので、その存立はなお不安定であるというのはラトガースの主張であった。州立師範学校が特別委員会に送った代表は二人で、トレントンの政治ジャーナリスト（Judge David Naar）が代表していた。

プリンストンからは学長（John Maclean, 1800—1886）と二人の教授（Atwater 教授及び化学担当の John S. Schenck 教授）が参加したが、いわば学者グループの代表であった。これに対しラトガースは元州知事ブルーム、キャンベル学長及びクック教授の三人を代表として派遣した。ラトガースの州都トレントンにおけるロビー活動、広報活動、基金募集の成功、実験室や標本類の整備、地理的条件等多くの点でラトガースはプリンストン、州立師範学校を上回り、結局ラトガースに軍配が上がったのである。ラトガースの意識した政治的作戦は効を奏した。

—119—
I 研究論文

しかし明らかに宗派大学であるラトガースに連邦政府の土地交付金が適用されるのは問題だと思う反対の声が上がったのは、むしろ自然の成りゆきであった。州内約80万人の人口の内10万人にも及び信者をもつメソジスト派から強い反対があり、これに対しタック教授と委員が、ラトガースの宗教的性質は科学校の教育に及ぼない旨を表明し、ようやく州上下院での決議を得たのである。3月24日上院にて12対6、3月30日下院にて50対1の票決であった。ここにラトガース大学はモリル法の適用を受ける州内唯一の大学として州の最終決定を得ることに成功したのである。

この決定は、同年4月4日に成文化され全12条から成る州法として公にされた。その第2条では、州委員会（Commissioners）が年2回ラトガース大学理事会に対し、基金から生じた利子を支払うことを規定している。即ち、ラトガース大学理事会が設立するラトガース大学科学校とその教育に対し、モリル法を適用し援助するという方式になったのである。第3条では大学理事会に対し、大学の一部門たる科学校の維持のみに基金を使用すべきことを義務づけ、第4条においては基金から生じる利子の額の2分の1に相当する額に見合うだけの奨学生を入学させるよう求めている。第6条では大学理事会が定められた責務を履行した時のみ利子が支払われることを定め、第7条では、科学校が州知事の任名による10名の構成員による監視委員会（Board of Visitors）の下におかれて、その委員会の役割は第8条で、監督と支配（Surpervision and Control）の全権を保持すると明記されている。即ち科学校は設立者たるラトガース大学理事会によって管理運営されるが、監視委員会によってもさらに監督と支配を受ける複合的な上部機関をもつ教育機関として成立したのである。

同年4月13日には基金を管理する委員会（Commissioners）に関する3条から成る法律が成立し、基金の運用方法、条件、委員会運営費等について定めた。基金の目減りを防ぐため委員は無報酬であった。州の一連の法的整備はこの法の成立によって終結し、大学側も同じ4月13日理事会を開催し、正式にモリル法の適用を受けることを宣言した。ここにニュージャージー州におけるモリル法の受け入れ体制は整ったのである。

この日の大学理事会には、早くもタック、モルレー両教授の共同になる科学校の教育計画が報告されている。報告はモルレー教授によって書かれたものである。

モルレー教授の報告は、最初にラトガース大学の基金獲得運動が成功したことを記した後、科学校での教育を三つの柱に分けて構想している。第一は農業分野であり、一般化学（理論及び実験）、動植物生理学、組織化学、分析化学、鉱物学及び地質学、植物学及び動物学、道路土木、農業実習及び農業会計がその教育科目にあけていられる。第二の分野は工学（Mechanical and Industrial Arts）であり、測量学、航海術及び天文学実習、土木、機械工学及び機械、鉱山工学、化学工芸等が考えられていた。第

--- 120 ---
モリル法（1862年）と私立大学の改革

三の支柱は、科学校の準備及び補習学習（Preparatory and collateral Studies）のコースで、代数、幾何、三角法、天文学、修辞学、作文、歴史等がその中核をなす基礎的科目であり、このコースのみ大学古典科（従来の大学課程をClassical Courseと呼ぶ）の学生と一緒に受講することができるように計画されていた。

教員組織は従来の教授陣で担当し、負担の増大するクック教授とモリル教授には補助教員を充てることを想定し、科学校開校までに整備を要する各種の施設や新しい建物に、22,000ドル相当の財源が必要となることを見積っている。この報告が提出されたのが4月13日であったから、モリル教授の手をとでまとめられたのは、3月30日の州議会特別委員会の時か、それ以後であろう。いずれにしろもモリル教授のもとには、イエール大学シェフィールド科学校、レンセラー学校、ユニオン大学等に関する資料が揃っていたことであろうことは前述の通りである。

5 科学校の開校とその教育

長かった南北戦争も終局にむかって、またラトガース大学の創立100周年も一年後にせまった1865年9月20日、ラトガース大学科学校は開校した。すでに前年度までには17州で20にも達する大学がモリル法の適用を受け設立させることができ決まっていった。

クック、モリル両教授による科学学校構想はさらに完成度を増し、1864年12月21日の大学理事会に報告された計画はほとんど最終案であった。理事会の議録には、科学校の目的、専攻コース（Courses of Studies）、教育課程（Arrangement of studies）、図書館、農場、天文台、寄宿舎、入学条件、授業料等が詳細にしるされている。

開校後最初に刊行された報告書によって科学校の教育課程を次にかつげる。前に示した大学古典科の課程と比較するとまことに対照的である。なおこの報告書は大学理事会が州知事へ毎年報告すべきものであった。

科学学校教育課程 1865—66年

I. 土木工学・機械

第1学年

第1学期
代数学、二次方程式
幾何学
設計図一建設問題
動物学礦物学初步
修辞学、弁論術、作文

第2学期
代数学、二次方程式
幾何学
設計図一建設問題
動物学礦物学初步
修辞学、弁論術、作文

II. 化学・農業

第1学期
代数学、一次方程式
幾何学
設計図一設計問題
動物学礦物学初步
修辞学、弁論術、作文

—121—
<table>
<thead>
<tr>
<th>学年</th>
<th>1学期</th>
<th>2学期</th>
<th>3学期</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1年</td>
<td>三角法, 測量, 航海術</td>
<td>記述幾何, 設計図</td>
<td>化学, 鉱物学基礎</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>記述幾何, 設計図</td>
<td>化学, 鉱物学基礎</td>
<td>自然地質学</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>化学, 鉱物学基礎</td>
<td>自然地質学</td>
<td>歴史</td>
</tr>
<tr>
<td>2年</td>
<td>分析幾何学</td>
<td>記述幾何, 設計図</td>
<td>物理学, 一般化学</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>記述幾何, 設計図</td>
<td>物理学, 一般化学</td>
<td>鉱物学</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>物理学, 一般化学</td>
<td>鉱物学</td>
<td>農学原理</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>鉱物学</td>
<td>農学原理</td>
<td>英作文, 雄弁術</td>
</tr>
</tbody>
</table>

第2学期

<table>
<thead>
<tr>
<th>言語</th>
<th>法国語</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>学期</td>
<td>第2学期</td>
</tr>
<tr>
<td>几何学</td>
<td>几何学</td>
</tr>
<tr>
<td>気象学, 気象記録法</td>
<td>気象学, 気象記録法</td>
</tr>
<tr>
<td>歴史</td>
<td>歴史</td>
</tr>
<tr>
<td>簿記</td>
<td>簿記</td>
</tr>
<tr>
<td>フランス語</td>
<td>フランス語</td>
</tr>
</tbody>
</table>

第3学期

<table>
<thead>
<tr>
<th>言語</th>
<th>法国語</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>学期</td>
<td>第3学期</td>
</tr>
<tr>
<td>代数学</td>
<td>代数学</td>
</tr>
<tr>
<td>測定法—測線</td>
<td>測定法—測線</td>
</tr>
<tr>
<td>植物学基礎</td>
<td>植物学基礎</td>
</tr>
<tr>
<td>自然地質学</td>
<td>自然地質学</td>
</tr>
<tr>
<td>歴史</td>
<td>歴史</td>
</tr>
<tr>
<td>簿記</td>
<td>簿記</td>
</tr>
<tr>
<td>製図</td>
<td>製図</td>
</tr>
<tr>
<td>フランス語</td>
<td>フランス語</td>
</tr>
</tbody>
</table>

第2学年

<table>
<thead>
<tr>
<th>言語</th>
<th>法国語</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>学期</td>
<td>第1学期</td>
</tr>
<tr>
<td>三角法, 測量, 航海術</td>
<td>三角法, 測量, 航海術</td>
</tr>
<tr>
<td>記述幾何, 設計図</td>
<td>記述幾何, 設計図</td>
</tr>
<tr>
<td>化学, 鉱物学基礎</td>
<td>化学, 鉱物学基礎</td>
</tr>
<tr>
<td>修辞学, 作文, 雄弁術</td>
<td>修辞学, 作文, 雄弁術</td>
</tr>
<tr>
<td>フランス語</td>
<td>フランス語</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>言語</th>
<th>法国語</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>学期</td>
<td>第2学期</td>
</tr>
<tr>
<td>分析幾何学</td>
<td>分析幾何学</td>
</tr>
<tr>
<td>記述幾何, 設計図</td>
<td>記述幾何, 設計図</td>
</tr>
<tr>
<td>物理学, 一般化学</td>
<td>物理学, 一般化学</td>
</tr>
<tr>
<td>鉱物学</td>
<td>鉱物学</td>
</tr>
<tr>
<td>農学原理</td>
<td>農学原理</td>
</tr>
<tr>
<td>材質強度, 構造安定</td>
<td>材質強度, 構造安定</td>
</tr>
</tbody>
</table>

英作文, 雄弁術
モリル法（1862年）と私立大学の改革

英作文，雄弁術

第3学期
微分積分法
水準測量，鉄道工学，地形図
地形図作製法
光学，光学計器
精神哲学科

第2学期
天文学，天文学機器使用法
建設工学，道路橋梁
精神哲学科

第3学期
水力工学
建設学，機械
建築学
合衆国憲法

科学学校の教育課程はイエールやハーバードの科学校と同じように3ヶ年の課程で，1年は3学期から成っていた。2年次第1学期までは両コースとも共通の課程で2学期
I 研究論文

から各々の専門の学習に入っていく。準備及び補習学習のコースは設けられなかったが、合理的な構想にもとづく編成であったことが理解できる。フランス語やドイツ語の学習の重視、精神哲学（Mental philosophy）、政治経済学、合衆国憲法の学習等が課せられたことは興味深い。この年、即ち1865年には大学古典科の教育課程にも一部改訂がなされたことを考え合わせると、ラトガース大学全体が、旧来の教育課程からより近代的な教育課程へ移行しつつある様がみえてとれる。特に科学科の教科目が網羅的な配列になっているのは、あるいはすでにドイツ大学（University）の影響を受けてのことであろう。クック、モルレー両教授が参考としたであろう大学は、いずれもドイツ帰国の教授を採用していたし、学問としての農業は、主にドイツにおいて発展していた。

ところで南北戦争中に成立したモリル法は、その戦時色として条文中に軍事教練（Military Tactics）の規定を含んでいた。ラトガースでは専任教員（Tutor）を配することとし、歩兵、砲兵等の教練を実施してモリル法の内容に応じている。各学年の第3学期の特別課程であった。この軍事教練は科学科の学生だけに課せられた課業であって、古典科の学生の参加はなかった。逆にまた古典科の学生に求められていた学問講話の授業、即ち宗教教育は科学科学生には無縁であった。ここでは戦時として大学と科学科は並立していたのである。

科学科生を教える教員組織は独立したものでなく、大学教授陣が兼ねた。科学科開校当初のラトガースの教授陣は次のようであった。

教授陣

【学長】キャンベル師、教育、神学博士、法学博士、道徳哲学担当
【副学長】クック教授、哲学博士、化学、自然史担当
【モルレー教授、文学修士、数学、自然哲学、天文学担当
【フィッシャー教授（Gustavus Fisher）、近代語、文学担当
【クリスベル教授（Rev. Cornelius E. Crispell）、文学修士、古代及び近代史担当
【ドウィトル教授（Rev. Theodore S. Doolittle）、文学修士、修辞学、論理学、精神哲学担当
【タッカー教授（Luther H. Tucker）、文学修士、農業理論及び実習担当
【スモック講師（Tutor, John C. Smock）、化学担当
【講師未定（Tutor）、数学、土木工学、軍事教練担当
【ナイト管理人（Superintendent, John H. Knight）、実験農場担当

教授7名、他3名の教授陣であった。科学科の全学年に学生を収容した1868—69年の
モリル法（1862年）と私立大学の改革

大学生数（古典科生）は129名（4年15、3年30、2年42、1年42名）であり、科学校生
は41名（3年7、2年20、1年14名）であり、ラトガー全体制で170名の学生であった。
科学校の新設は、キャンベル学長の期待した学生数増加に十分に応えていた。
科学校入学の条件はやや苛酷なもので、16歳以上で数学、代数学（2次方程式）、英文
法、地理等の試験に合格すればよかれた。この入学の条件はトレンタントの州立師範学校
とはほぼ同様のものであったが、縦字と読み方（Spelling and Reading）だけがさら
に師範学校希望者には課せられていた。成人の入学希望者には特別な処置が講ぜられた
が、イェールやハーバードの科学校の先例にならせてとのことであろう。
授業料は年額で75ドル、分納することが可能であった。雑費8ドル、卒業証書発行費
5ドル及び実験費若干が必要で、寄宿舎は科学校生に用意されなかったので、学生
には負担が大きかった。
入学者は当初ほとんど9割以上が州内の出身者であり、いくつかの郡（Counties）か
らは無償の学生を入学させている。無償学生の枠は、規定によれば40名であったが387
開校後ただちにこの数が満たされることはなかった。ニュージャージー州の公立学校
制度は1838年に確立されたが、1871年に至るまでその無償化は実現せず、従って公立学
校から科学校入学という進路もまだ開拓される以前の状態であった。州外からの入学者
は全てニューヨーク州からであり、1867—68年のカタログには、遠く日本からの留学生
を受け入れていることが見出せる389。ラトガー大学と日本との交流の端緒である。
科学校の卒業生は主にニューヨーク州に職を求め、また中西部等へも進出している。
この点では社会移動（Mobility）に貢献しているが、卒業生の多くが土木工学、機械の
学生であったことを考えるとはじめ当然のことであろう。大学古典科と科学校の卒業生
の就職状況を科学校開校後の最初の10年の卒業生で対比すれば、次の通りである。

<table>
<thead>
<tr>
<th>大学卒業生99名</th>
<th>科学校卒業生59名④</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1868年 23名</td>
<td>1868年 7名</td>
</tr>
<tr>
<td>1869年 22名</td>
<td>1869年 20名</td>
</tr>
<tr>
<td>1870年 28名</td>
<td>1870年 14名</td>
</tr>
<tr>
<td>1871年 26名</td>
<td>1871年 18名</td>
</tr>
<tr>
<td>聖職者 31名</td>
<td>土木技術 15名</td>
</tr>
<tr>
<td>法律 28名</td>
<td>商業 7名</td>
</tr>
<tr>
<td>医学 11名</td>
<td>農業 3名</td>
</tr>
<tr>
<td>他・不明 29名</td>
<td>他・不明 34名</td>
</tr>
</tbody>
</table>

名簿上の制約があるとしても大学卒業生と科学校卒業生の就職進路には明確な相違が
ある。大学卒業生の7割は専門職（earned professions）に就いているのに対し、科学

— 125 —
I 研究論文

校卒業生の進路はある種の困難さを示しているようである。特に科学校の各種報告書や年報に記されている Agriculture や Agricultural の分野は、その実際においては不振であった41)。19世紀後半のアメリカにおける農業の混迷の一端を示しているのか、あるいはすでにニュージャージー州が都市化（Urbanized）された州として形成されてしまって農業の機会をより少なくしていたとも考えられる。科学校で最新の農業を学んでも耕すべき土地を購入するのには、なお一層の困難が伴なったに相違ない。

ラトガース大学科学校はこうして開校したが、大学の宗教的性格はなお残り、新興の科学校もなおその特色や性格に不鮮明なところを残しつつ、ラトガース大学は定かならぬ方向を模索し続ける。

6 おわりに

ニュージャージー州とラトガース大学は、他の植民地大学のように一植民地大学という関係ではなく常に複雑な関係であった。加えてラトガース大学を支える人々は、少数宗派の会員であり、オランダ系やスコットランド系の人々といった少数派であった。19世紀中盤は移民が盛んであったが、ラトガースを支える直接的な基盤になり得なかった。またプリンストン大学は大学教育に最も熱心であった長老派の頂点に立った大学であり強大であった42)。こうしたことはラトガースと州との関係を特殊化した。何度かプリンストンやコロンビアに併合されそうな危機を経て来たラトガースにとって43)、州は宗派に次ぐ有力な保護者であったかも知れない。科学校を開設した頃の宗派の教育事業年報にもラトガースの記事は極めて少なく44)、むしろ宗派私立大学ラトガースの世俗化の第一歩を物語っているようである。まして公平な科学校を併設した事実は、植民地大学的性格のラトガースへの訳別を意味するだろう。ラトガースは、この1860年代の改革からさらに90年の歳月をかけてニュージャージー州立大学（State University）へ転換していく45)。科学校の成立が最も大きな契機となったのである。ラトガースの科学校成立をめぐる大学改革の事例は、多様なアメリカ大学観の中でも一層重要なのである。

しかも科学校開設に至る過程でキャンベル学長によって集められた多額の寄付は46)、宗派を支える人々からのものが主であったことを考えると、ラトガースにも新しい時代が到来していたということがわかる。すでに科学と宗教は対立する図式では捉えられないと時代に入ったのである。大学の裏口からしだいに深くなった新興の科学が、すでに100年を経た大学の性格を根本から変える程のエネルギーをもっていたのである。

クック教授とモーレー教授が計画した科学校での教育過程は、やがて古典科教育課程の改編へと続き、1868年には初步的な選択制（Electives）が導入されている47)。ハーバード、ハーバード、ブラウン等の大学で実施されていた選択制教育課程は、もう一つの
モリル法（1862年）と私立大学の改革

大学改革としてラトガースにも及び、また伝統的な口述による試験は、1865年モリル教授の指導のもとに学内一斉の記述試験に改められ、また大学理事会が大学院の設置を検討しはじめたのもこの頃であった。科学学校成立に前後する数年間はまさしくラトガース大学にとって改革の時代だったのである。

宗派私立大学ラトガースの改革は、教育課程により広範な学問分野を加え、旧来の教育課程に専門的分野を調和させ、教科書中心の教育方法に実験実習等の新たな方法を組み込み、図書館、実験室、実験農場等の施設を整備し、教授陣をより充実拡大し、卒業生に対する大学支援の方針も確立することに成功した。しかし何といっても重要なことは、モリル法の適用を受けることによって、土地交付大学（Land-Grant Colleges）の一員として国家的規模の教育体制に組み込まれ、どちらかといえば孤立しかたな宗派大学から脱皮できたことである。州との関係では、なお痛感を残しながらも、州の援助を受ける私立大学として発展を続けるのである。

ラトガースと日本との特別な関係は、こうしたラトガース大学の未曾有の改革時代にその端緒をもった。後の文部省学監に就任することになるモリル教授が、まだ30歳代の若手教授として大学の改革運動の中心的役割を担っていた。この時代に日本から留学してきた日下部太郎（学校1870年卒業、同年死亡）、松村淳巌（同1871年卒業）、杉浦弘蔵（島山義成、同、永井五百介（吉田清成、同）等にとってモリル教授はまことに頼もしい指導者として映ったことだろう480。

またこの改革の時代のラトガースに学んだW. E. グリフィス、E. W. クラーク、そしてM. N. ウイコフ等がやがて来日し490、日本の教育に立った時、ラトガースにおける様々な改革が、そして学校の教育が、彼らの脳裏に浮かんだであろうことは想像に難くない500。

ラトガース大学における科学学校成立をめぐる様々な変革に目を向ける時、R. フロスターの指摘するアメリカの大学のカレッジからユニバーシティーへの進展は、この小さな宗派私立大学の中で行われた、地味ではあるが確固とした改革の中にも認めることができるのである。

[注]
2) 例えば大浦猛「モリル法とアメリカの州立大学」 日本教育学会「教育学研究」第32巻第2,3 併合号 昭和40年等がある。
4) なお本論稿に先だって予備的考察として、拙稿「日本の近代教育とラトガース大学」 日本大学人
I 研究論文
文科学研究所「研究紀要」第27号 1983年及び「ラトガース大学・大教授の立」と「大学の自由の歴史」東京大学出版会 1960年
5) (注) 1の翻訳書、井門富二夫・藤田文子訳「学問の自由の歴史」東京大学出版会 1950年
7) フリーリングハイザンは、ラトガースのグラマースクールに学び、1804年プリンストン大学卒業、1844年にホイッグ党の副大統領候補となる。大統領候補は Henry Clay であった。
8) 神学校とラトガース大学の関係は、History of Rutgers: Or an account of the Union of Rutgers College and the Theological Seminary of General Synod of the Reformed Dutch Church. New York, 1833 参照。
10) 本論稿では David Murray の表記はモルレーとする。
12) この問題の始まりは、Cook Papers (クック文書、ラトガース大学アリサンダー図書館) に収められている手紙で知ることができる。例えばオーバーニーのモルレーからクック教授宛 (1863年7月16日付) の手紙は、モルレーがラトガースの教授に就任することを伝えている。
13) 後任学長は Merrill E. Gates で、オーバーニー大学では 1870-1882年の間学長、その後は Amherst Collegeの学長となる。
14) 前掲『学問の自由の歴史』 II, 409頁。
17) モルリー法に関する研究を含む「アメリカ高等教育史に関する基礎研究」学習院大学短期大学「紀要」第21号 昭和48年があり参考となった。
18) Chapter 222, Laws of N.J., 1863 Rutgers University, Rutgers University: Federal and State Relations. New Brunswick, 1928 p.35
19) 21万ユーロー（または約160ユーローで1セクションとして全1,312セクション）の内、225セクションは70セントで、残り1,087セクションは50セントで売却された。McCormick, Op. Cit., p.89
なお G.Lester Anderson ed., Land-Grant Universities and their Continuing Challenge. Michigan, 1976 の Table 3 には各大学別の土地面積（含証書）、売却価格、基金賠償、不売却等の一覧があり参考となった。
またモルリー教授の最初の年俸は1,600 ドルでありから5,800 ドルの基金利子は若手教授4人分の俸給に満たなかった。
22) Cook Papers (1863年) 所収。
23) 「イエール報告」については、宮沢康人「ハーバード学則改正 (1825) とイェールリポート
モリル法（1862年）と私立大学の改革


24) 潮水守一『大学と社会』第一法規 昭和57年 76頁。

25) 科学校については、前揭『大学と社会』及び立川明「19世紀アメリカの大学と科学」大学史研究会「大学史研究」第2号1981年が参考となった。

26) Rutgers College Board of Trustees, Minutes: September 16, 1862—October 1, 1872. pp.57—58

27) ラトガース大学のCharter は、1766年11月10日付で授与されたが、現存するのは、1770年3月20日付のものである。その中に、"for the education of youth in the learned languages, liberal and useful arts and sciences, and specially in Divinity" ある。Rutgers University, Op. Cit., p.10

28) 小野次男『アメリカ教師養成史序説』啓明出版 昭和51年 400—405頁。

29) 例えば、Fredonian 紙、1864年2月18日掲載の "Considerations in Regard to the Disposal to Be Made by the Legislature of New Jersey of the Lands Granted by Congress for Encouraging Education in Agriculture and the Mechanic Arts" 等は重要であろう。Sidar, Op. Cit., p.86, 241


31) Chapter 369, Laws of N.J., 1864


33) Rutgers College Board of Trustees, Op.Cit., pp.68—73

34) Report of the Trustees of Rutgers Scientific School, To his Excellency Joel Parker, For the Year 1865. Trenton, 1866 p.10—11

35) 1871年入学生から4年制課程へ移行した。

36) ドイツ留學帰りの学者の見たモリル法による大学教育の実際は、ドイツ的理念に基づくよりも、むしろ職業訓練なものであった。Jurgen Herbst, The German Historical School in American Scholarship. New York, 1972 p.79

しかしラトガースにおいては、科学的原理と科学的探究の方法を教えることを第一の目的としていた。Cidar, Op. Cit., p.106

37) (注)34 pp.3—4  この一覧はあまり正確でない。例えばモルレー教授は、1863年に PH.D. の学位を得ている。

38) Second Annual Report of the Board of Visitors of the Agricultural College of New Jersey, For the Year 1865. Trenton, 1866 p.8 によれば全21郡から各々1名から6名まで合計40名が確保されていた。

39) Catalogue of the Officers and Students of Rutgers Scientific School, New Brunswick, N.J., 1867—68. Newark, 1868 p.2 には、Taro Kusakabe, AchiZen, Japan 62 Church St. ある。

40) Catalogue of the Officers and Alumni of Rutgers College, in New Brunswick, N.J., From 1770 To 1871. New Brunswick, 1872 pp.48—53 から算出した。ただし神、法、医の専門学部・大学への進学はそのまま職業として扱った。


—129—
I 研究論文

42) Donald G. Tewksburg, The Founding of American Colleges and Universities Before the Civil War. New York, 1969 (Reprint ed.) によれば、長老派は南北戦争以前に49大学（現在存する）を設立している。pp.90－103


45) このことをGeorge P. Schmidt は、まさしくダートマス大学事件の逆の事例（the Dartmouth College case in reverse）として評価している。The Liberal Arts College, Connecticut, 1975 (Reprint ed.) p.156


47) Vittum, Op. Cit., p.91

なお1867年8月、モルレー教授はニューヨーク州オーバニーにおいて“Educational Economy”と題する講演をし、その中で教育課程の拡大や選択制の導入について説いている。David Murray, Educational Economy. New York, 1876 p.56

48) 日本人留学生の名前は、注40の名簿に記載されている。なお石附賢『近代日本の海外留学史』ミネルヴァ書房、昭和47年 54頁、157－19頁及び海外留学生リストが参考となった。

49) William Elliot Griffis, The Rutgers Graduates in Japan. Albany, 1866 が詳しい。